

論文審査の結果の要旨および担当者						
学位申請者	辻 翔太郎					
論文担当者	主査	道免 和久				
	副査	島 正之				
	副査	平田 淳一				
学位論文名	Low back pain is closely associated with frailty but not with sarcopenia: Cross-sectional study of rural Japanese community-dwelling older adults (腰痛はサルコペニアではなくフレイルと密接に関連する：地域在住高齢者横断研究)					
論文審査の結果の要旨						
近年、急速な高齢化に伴い平均寿命と健康寿命との乖離が問題視されている。健康寿命の短縮を引き起こす病態として、筋肉の量的質的低下で定義されるサルコペニア、心身の活力低下により発生するフレイルが注目されている。また、腰痛は活動量の低下を来すことから健康寿命の短縮に関与する。本研究の目的は、地域在住高齢者における腰痛とサルコペニア・フレイルとの関連を大規模疫学研究で明らかにすることである。						
対象は丹波・篠山圏域における高齢者疫学研究 (Frail Elderly in Sasayama-Tamba Area : FESTA) に参加した高齢者 730 名。腰痛による機能障害は Oswestry Disability Index (ODI) で評価。サルコペニアは AWGS 基準で健常群、低筋肉量群、サルコペニア群に分類、フレイルは J-CHS 基準で健常群、プレフレイル群、フレイル群に分類し、腰痛、ODI スコアとの関連を検討した。						
その結果、本母集団における腰痛合併 57.8%、フレイル 4.9%、プレフレイル 57.4%、サルコペニア 7.1%、低筋肉量群 25.6% であった。フレイル群、プレフレイル群においては腰痛合併率が有意に高く、ODI スコアも有意に高値だった ($p < 0.001$)。一方でサルコペニア群、低筋肉量群と腰痛、ODI スコアには有意な関連を認めなかった。フレイルの構成要素との関連において ODI スコアは、握力低下、歩行速度低下、易疲労感を有する場合、有意に高値だった ($p < 0.01$)。以上から腰痛および腰痛による機能障害とフレイルとの間には密接な関連があるが、サルコペニアとの間にはないことが明らかとなった。また高齢者における腰痛は、フレイルで定義される身体機能の低下や易疲労感で示される心理的機能の低下にも関連し、健康寿命の短縮に関与する可能性が示唆された。						
本研究は超高齢化社会において極めて重要なフレイルと腰痛の関連を明らかにした意義あるものであり、学位論文に十分値するものと評価した。						